

令和6年度 大阪府感染症発生動向調査委員会

■日時：令和5年7月31日（水）午後2時から午後4時まで

■場所：大阪健康安全基盤研究所 北館3階 OIPH ホール

■出席者（委員）：

氏名	所属
磯ノ上 正明	大阪皮膚科医会
岩佐 厚	大阪泌尿器科臨床医会
木下 優	大阪府保健所長会
塩見 正司	大阪府医師会
富吉 泰夫	大阪小児科医会
中山 浩二	大阪市保健所
早川 潤	大阪産婦人科医会
東野 博彦	大阪府医師会
宮浦 徹	大阪府眼科医会
宮川 松剛	大阪府医師会
安井 良則	大阪府済生会中津病院

（五十音順、敬称略）

■欠席者（委員）

大平 真司（大阪府医師会）、三宅 眞実（大阪公立大学）

■議事「大阪府感染症発生動向調査事業実施要綱の改正及び感染症関係の通知等について」

要綱の改正及び感染症関係の通知等の報告

■議事「2023年感染症発生動向調査事業の報告」

2023年感染症発生動向調査事業報告書（暫定版）の概要について報告。

■議事「2023年の主な感染症」

2023年1月～12月の大阪府全域における感染症発生動向について資料に沿って報告。

1. インフルエンザ

第5週に定点あたり報告数が30.28と、警報レベルを超え、最も高くなった。

その後ほぼ横ばいで推移し、第33週に1.10となり、過去10年で最も早い流行期入りとなった。

2. 咽頭結膜熱

第27週まで例年と同様の傾向を示していたが、その後増加傾向となり、第35週に、現行の集計方法になって以降初めて警報レベル3を超えた。

3. ヘルパンギーナ

第19週以降増加傾向となり、第25週に報告数7.69となり、ピークが形成された。

過去10年間で、報告数の総計が最も多くなり、定点あたり報告数の最大値は、2014年第29週(8.75)に次いで高かった。

4. A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第18週まで低い水準で推移していたが、その後増加傾向となり、例年と同様の傾向を示していた。

第33週以降増加傾向となり、第50週に定点あたり報告数5.53で過去10年間で最大となった。

5. 新型コロナウイルス感染症

2023年第1～18週までの新規陽性者数の累計は299,329例であった。

定点把握疾患になって以降、増加傾向を示し、第30週に定点あたり報告数が最大の14.7となった。

その後、一旦減少傾向に転じたが、再び増加傾向となり第36週に定点あたり報告数が14.6となった。

6. エムポックス

大阪府で初の報告が第11週にあり、総計は22例となった。大阪府で報告があったのはすべて男性であった。

7. 梅毒

2022年を上回る報告数(2019例)であった。

男性では最も報告数の多い年齢区分は 20 代前半～40 代前半と幅広いが、女性では、20～24 歳で最も多かった。

女性の報告数の増加に伴い妊娠例の報告も増加した。

男性では、早期検証梅毒 I 期での報告が多く、女性では無症候での報告が多い。

■議事 意見交換会「テーマ：溶血性レンサ球菌感染症」

A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎は 2020 年から 2022 年は、咳エチケット、手洗いなどにより、例年と比べ報告数は激減した。しかし、2023 年には、例年以上の報告数があったため、2024 年以降の感染状況に注視する必要がある。

劇症型溶血性レンサ球菌感染症 (STSS) の発生届は、コロナ禍で一時減少したが、2023 年は増加に転じている。臨床においては、小児科病院で重症事例もあり、早期診断と治療が重要である。

海外で新たな高病原性株として報告された M1UK 系統株が大阪府でも検出されており、引き続き、咽頭炎および劇症症例分離株の解析を積極的に進める必要がある。